



〈フジハラ〉 口になる。(アヤさんを向いて) 何になると思う？

〈アヤ〉 口ができて、肛門までができる？

〈フジハラ〉 そう、口から肛門というふうに腸はできていくイメージがあるでしょう。そういう動物もいますが、人間は違うんです。実は、肛門から口に向かうんです。原口というのはお尻なんです。つまり、人間の一番スタートというのは、お尻から穴があいていく。で、最終的に口のあたりに到着して、パカッと口があくんです。それではじめて人間が人間らしくなっていく。人間の原理としては、お尻の穴からあいて口ができていく。ここでチューブが通って、それがいろいろ進化していったって、人間になったりカエルになったり牛になったりするということがわかるんですね。

ここで「人間はチューブである」という話をしたのは、たとえば、さつきおにぎりを食べましたけれども、おにぎりのお米というのは、田んぼがあつて、田んぼから稲が持つてこられて、スーパーに行つて、お父さんお母さんがスーパーから買つてきて、台所で炊飯すいはんしますね。で、それを、口から入れて肛門から出して、これを下水道に流します。トイレですね。口からトイレまできて、下水道に流していく。下水道で、食べたものの残りものはもう一回微生物

物処理されて、畑に戻っていつたり自然に戻っていつたりします。

どういふことかというところ、食べものは口から入るじゃない？ 口から入って、からだ中をグルグルまわって、外に出ていく。これが今日、わたしが言いたいことの一つなんですけれども、食べものつて旅をしているんです。ずっと旅をしている、そのほんの一部分だけ人間がかかわっているわけです。

つまり、食べるということ、食べものは、生きているものたちによつてにぎわっている世界のなかの、ものすごい大きな循環のなかの一部にすぎない。わかるかな。

★人間は「生きもの殺し装置」だった

〈フジハラ〉 ということは何かというと、わたしたちというのは、よく言われるように、殺したものを食べているのです。もう少し残酷ざんぐな言い方をしますと、「生きもの殺し装置」ですね。もちろん、口に入っている段階でその食べものが生きているということはほとんどありませんが、それまでに殺しているのです。

そういえば、イカの踊り食いを食べたことある？

〈そら〉 海老の踊り食いなら、食べたことがあります。

〈フジハラ〉 どんな気分だった？

〈そら〉 いや別に、普通においしいなあつて。

〈フジハラ〉 「普通においしいなあ」つて言い方が面白いね（笑）。わたしも踊り食いたことがあるんですけども、口のなかでまだ動いているんですね。くねくねつて動いていて、これをゴクンつて飲むんだけど、なんだか、このへんの喉のあたりまで生きている感じ。でも、ここから死んでいくんだけど。誤解を恐れずに言うと、わたしたちは生きものを殺しているわけですね。それを、自分の栄養にして、チューブを通つて、トイレに出して。トイレで出したものは、特に微生物にとつて非常に栄養が豊富なので、それは結局、土や海に帰つていきます。それが循環のなかにあるわけですね。

そう考えると、食べるという行為は、それは動物も人間もただけど、何かを殺して自分のなかに食べものの旅を通していく通過点。駅のような感じ。わたしたちは山手線の品川駅みたいなもので、食べものが「通ります」「止まります」「出ます」という、そういうふうなものとして捉えることが、まず一つですね。